

栃木県文芸家協会 文芸講演会

8月24日(日) 13:30~15:00

ホテル丸治

テーマ 「政治と文学の間(はざま)」 レジュメ

小林守城

1 はじめに

「一行の詩があれば」・・・私の人生2毛作・・・「私の生きた刻」の冊子化について
荷が重い課題、問い続けるしかない永い課題、

- * 詩は趣味か遊びかアクセサリーか、職業か、プロパガンダ(広告・宣伝)か
宗教的・美的求道か救済か。それとも自律した言語芸術空間か
- * 言語表現に関わる人は、今日の「お守り言葉政権」に対して一言無かるべからず。さ
もなくば、あなたは何ものか、孤独認識症患者か、地や空を這う無傷のナルシストか。
あるいは、神か天使か世捨て人か。それとも無知という野蛮か。

2 政治と文学の間の仕分け

- * 政治・社会と詩人(文芸者)との関係
- * 芭蕉の風雅の道「夏炉冬扇」「不易流行」は可能か。

石川啄木・・・歌は私の「悲しい玩具である」

黒田三郎・・・詩人の名において責任を免除されることは何一つありはしません・・・
天上の星を夢見ること足が地から離れてはならないのです・・・いつ誰か読んでくれる
か分かりもしない詩を書くより、ひとりの女と一緒に生きた方がどんなにいいか。

中桐雅夫・・・戦いと飢えで死ぬ人間がいる間は、おれは絶対風雅の道をゆかぬ

アドルノ・・・アウシュビッツのあと詩を書くことは野蛮(不可能)である。

山頭火・・・句作すなわち道である。「生死の中の雪降りしきる」

- * 政治家と詩人との関係

「詩のある政治」をめざしていたこと、問題解決や現実社会の変革に対する
リアルポリテックス(力と多数の正義)と
芸術や文学の世界の感性的論理(愛・真理・・・同時解放論)

3 政治と文学の対立から統合への方向

言語機能の二面性、「積極的平和主義」と言葉の危機

- * お金より命。経済より生命。子どもを守ろう。日本の国土を守ろう。福島(原発)
のあと沈黙しているのは野蛮だ!・・・坂本龍一

4 「懐かしい未来」 ヘレナ・ノーバーグ・ホッジ (Sweden)

経済・社会(マネー資本主義)に対する里山資本主義の補完機能、バックアップシ
ステムの必要性・・・(詩の言葉の再生もここにあるのではないか)

再生されるべき「懐かしい未来」はどのようにしたら展望できようか。

農的生活。地域経済(地産地消)、脱原発、自然再生エネルギー(木質バイオ)、有
縁社会、都市から里山への人口移動